

こいのうた

じゅしん

ほんとはね、

ずっとずっと好きだったんだ

冷やかされて

否定して

心もだんだん違うって思い込んで

そして

君に彼女ができたから

隠してたけど

ほんとは好きだったんだよ

願えばキリがない

冷たい雨に打たれ
それでもあなたは
彼女の元へ行くの？
ああ 一度別れたと聞いて
私の心は確実に喜んだのに

遠い、

あの時は

隣を歩いたのに

今だって

手を伸ばせば届くのに

君がすごく遠いよ

それでも君が好きだったんだ

チラリズムロマンス

チラリと見ると
パチリと目が合うの
ドキリとすがる
ニヤリと貴方は不敵に微笑むの

悔しいったいらないわ
あたしはいつつもだっけな
いっつも頭にを占領されてのよ
貴方けっつけていきここのは
好きとってこととで…

チラリと見ると
パチリと目が合うの
ドキリとすがる
ニコリと貴方は優しく微笑むの

過去と現在

愛しいから見つめていた
切ないから見つめてしまう
好きだから好かれたかった
好きだから嫌われたくない
終わりなんてないと思った
もう始まりすらわからない

いつからだろう
どうしてだろう
貴方は遠すぎる

桜

桜咲く 季節が来た
貴方に恋をした 季節が

あの日と今日は 違う
同じ季節なのに
桜は咲いているのに
同じ桜は咲いていないから

貴方は気付かないふりをして
私の隣を通る
桜の花弁が舞い上がった事には気付くのに

私は気付かないふりをして
貴方が隣を通るのを待ってる
桜の花弁が散った事には気付くのに

桜散る 季節が来る
貴方への恋を閉じ込める 季節が

本気のスキ

仲良くなるうちに
冗談で好きって言い合って
本気で好きって言う
タイミングを逃した
多分ずっと 君に片思い
私はずっと
君の好きって嘘を否定して
こっそり泣くんだろう
ねえ 君に言った「好き」は
全部本気だったよ
ずっとずっと 友達でいてね

君の罪

君が吐く嘘はとても優しい
君の「好き」は
嘘を前提とした言葉
それならそうと
はっきりあたしを拒絶して
あたしの心だけでも
返してくれないかなあ
偽証罪に窃盗罪
まったく君は最低な男だよ
でもあたしは 幸せなんだよ

冗談の大好き

久しぶりだね

また 笑い合えるなんて

思わなかった

笑顔が似合う君

少し 大人に近付いた？

そんな君も 好きだよ

君が冗談で言う 好きが

たまらなく嬉しいのは 秘密だから

私も 冗談

好き 好き 好き

ほんとうにまだ 大好きなんだ

ヒトメボレ

例えば

授業中の保健室や
朝の静かな駐輪場で
あたし達は出会った

いつもと少しズレた学校で出会う
あたし達

貴方は

授業中にかけてる眼鏡を
かけてなくて
あたしは
いつもよりお喋りで
リップが乾くのが早い

ただ

すれ違っただけ
目が合っただけ

それでも あたしは——...

友達以上恋人未満

君は 友達だけだね
恋人がいたら
こんな感じかなあ って
私がゆっくり歩いて
君が追いついたら
歩幅を自然と合わせてくれた
そのさりげなさに
ちょっと 照れちゃった
でもきっと
あの時君を見つめてしまったら
私達の居心地のよい関係は
壊れたらろうね

Cry for the moon.

届かないなりに好きなで届かないから想いつづけたとう
体が千切れるよいうな激しい想いではななくいただけなとう、
私達は旅人だ
言葉から言葉へ
記憶から幻想へ
愛しきといるといいう言葉は嘘くさくて
好きといこのは軽すぎた
雪が解けて春に枯れる頃とその結晶を求めて北へ
葉が染まっただけに枯れよるとする頃を陽の暖かさ
月を餓え星を取り太陽を掴もうと翼を作る
私達の武器はいっただけ言葉だった
うまく伝えられないうのはどうしてなのだろう
ただ一言あなたに会いたいと言っただけなのに

願

願えばキリがないのに
あなたに依存してしまう
想えばキリがないのに
不安が私を支配する
私は生きてます
でも 何のために？
終わらないのなら
終わらせたいんです
ありがとう さようなら
思いを伝える言葉は
いつも陳腐で
笑わせるわ
ねえ もっと
もっともっともっと
愛してるって囁いて

雨

春の雨は細かくて
桜が散るのは寂しいけれど
優しくまつ毛が濡れる君が綺麗で

夏の雨は激しくて
冷たくて気持ちよくて
僕ら二人だけの世界で笑い合った

秋の雨はぽたぽたと
金木犀が水溜まりに浮いてた
暖かく冬支度を告げる

冬の雨は冷たくて
濡れる足はそそくさと宿を求める
君と雨を眺めながら
ココアでも飲みたいな

涙の雨は静かに甘く
嬉しくて だったらいいな
君の幸せを願っているよ